

飲み会が終わったのは、二十一時を少し過ぎた頃だった。

幹事の先輩が「じゃあ解散で」と声をかけて、そろそろとお店の外に出る。冷たい夜風が頬に当たって、少しだけ頭がすっきりした。四杯飲んだビールの酔いがちょうどいい具合に回っていて、足元は軽く、でも思考はまだちゃんとしている……そのくらいの状態。

早く帰ろうと思っていた。本当に。

「ちょっといい？」

後ろから声をかけられて振り向くと、岐平さんが立っていた。コートを羽織って、片手にスマートフォンを持ったまま、さらりとした顔でこちらを見ている。

街灯の下で見る横顔は、悔しいくらい整っていた。鼻筋がすっと通っていて、酔いの残る周囲の人たちの中で、岐平さんだけがひとり、妙に涼しげに見える。

「もう少し話したいことがあってさ。来てくれる？」

歓迎会はもう終わっている。仕事の時間でもないし、明日でもいい話なら、今わざわざついていく必要なんてないはず。

(でも……上司、だし……)

断ったら失礼だろうか。感じが悪いと思われないだろうか。そんな考えが、酔いで少し鈍った頭の中をぐるぐる回る。

岐平さんは急かすでもなく、ただこちらを見ていた。余裕のある立ち方だった。無理に詰め寄ってくるわけでもないのに、その視線に促されると、なぜか「帰ります」とは言いにくい。

「……あの、仕事の話ですか？」

「まあ、それもある。今日のうちに話しておいたほうがいいと思ってさ」

「……少しだけなら」

そう答えると、岐平さんの目元がわずかに緩んだ。

「ありがとう。こっち」

当たり前みたいに歩き出す背中を、私は半歩遅れて追いかけた。

連れていかれたのは、大通りから一本入った路地にある居酒屋だった。外観はひっそりとしていて目立たない。。でも引き戸を開けると、中は広くて、カウンターの奥にいくつもの個室が並んでいる。

「完全個室で」

店員さんも慣れた様子で「いつもの奥でよろしいですか」と小さく確認した。岐平さんは短く頷くだけだった。その仕草まで妙に様になっていて、胸が落ち着かない。

一番奥の部屋に案内されて、引き戸がぴしゃりと

閉まった。その音が、やけに大きく聞こえた。

四人掛けのテーブル。向かい合わせじゃなく、岐平さんは隣に座った。テーブルの角を挟んで、肩が触れそうな距離。

（なんで隣に……？ 向かいに座ればいいのに……）

そう思ったけど、言えなかった。岐平さんはメニューを開いて、ごく自然な顔でなにかを選んでいる。

「飲める？」

「あ、はい……」

「じゃあこれと、これ」

私の返事を待つ前に、店員さんに注文していた。

料理が来て、会話が始まった。仕事の話、部署のこと、前職のこと。岐平さんは聞き上手で、私がなにを言っても自然に返してくれる。個室の外からは、店内の賑やかな声が聞こえてくる。笑い声、乾杯の音、食器が当たる音。

（岐平さん、部署の女の子たちからモテるのわかるな……）

それに、ただ聞いているだけじゃなかった。私が少し言葉に詰まると、岐平さんはすぐに要点を拾ってくれる。言い直す前に「つまり、そこが引っかかってるんだ」と整理されて、思わず頷いてしまった。頭の回転が速い。しかも、それを見せつけるような言い方をしない。こちらが話しやすいように、自然に道を作ってくれる。

そのせいで、気が緩んだ。

（なんか、普通に楽しい、かも……）

そう思った瞬間だった。

岐平さんの手が、さりげなく私の膝の近くに置かれた。

「……っ」